

令和3年6月14日（月） 第5回富山県成長戦略会議 議事要旨

<開催概要>

- 1 開催日時 令和3年6月14日（月）14：00～16：00
- 2 開催場所 富山県庁4階大会議室、オンライン
- 3 出席者（五十音順）

高木 新平	株式会社ニューピース代表取締役社長
土肥 恵里奈	株式会社ママスキー代表
中尾 哲雄	富山経済同友会特別顧問
中村 利江	株式会社日本 M&A センター専務ＣＣＯ、 株式会社出前館エグゼクティブアドバイザー
藤井 宏一郎	マカイラ株式会社代表取締役ＣＥＯ
藤野 英人	レオス・キャピタルワークス株式会社代表取締役会長兼社長
前田 大介	前田薬品工業株式会社代表取締役社長
藻谷 浩介	株式会社日本総合研究所主席研究員
吉田 守一	日本政策投資銀行富山事務所所長

<議事次第>

- 1 開会
- 2 議事
 - ① 基調報告
 - ② 意見交換
- 3 閉会

1 開会（知事挨拶）

この成長戦略会議は本日で5回目の開催となった。前回は、観光、移住、子育て、広報戦略という広範なテーマで、安宅和人特別委員、山崎満広さんの基調報告を基に議論を展開いただいた。

今回のテーマは人口減少、移住政策、女性活躍。本県の昨年の出生数が6,256人と戦後最少となった。事実を真摯に受け止め、今後の取組に反映しなければならない。

一方、昨年の本県への移住者が過去最多の764人となった。ビヨンドコロナを見据え、移住の戦国時代の中でも選ばれる移住先になれるよう努めていきたい。

そのためには、SDGsのゴールであるジェンダー平等も大きな要素である。女性も活躍し、性別、年齢、キャリアに関わらず、チャンスがあり夢をかなえることができる、多様性のある富山県を目指したい。

本県でも初めて女性副知事が誕生し、組織改編で働き方改革・女性活躍推進室を設けた。女性活躍の推進体制を強化し、取組を加速したい。女性特有の課題をテクノロジーで解決に導くフェムテックにも着目し、8月にフォーラムを開催予定としている。

県内企業で女性活躍をさらに後押ししていきたい。横田副知事の就任挨拶にあったように、女性の何々誕生がニュースにならない富山県にしていきたい。

本日は、土肥恵里奈委員、藻谷浩介委員、高木新平委員から基調報告をいただき、自由闊達な、突き抜けるような議論をお願いしたい。

2-① 基調報告

【土肥委員】講演資料に基づき説明

- ・ 「ママスキー」は、子育て世代のママたちに、生きる上での様々な選択肢を増やしていこうという理念を掲げて、今のママたちが楽しんでいる姿を次の世代に見せていく、その結果、ママに憧れる人が増えていく、そんな社会をつくりたいと思って、様々な事業をしている。
- ・ 主に情報サイト、イベント企画、ママが集まれるような場所の運営をしている。ウェルビーイング、幸福度に軸に置き、選択肢を増やそうとか、選べる自由をつくっていききたいとか、出会いの場をつくりたいということで、7年くらい事業を運営してきた。
- ・ 子育てしやすい社会づくりや、子育て世代の幸福度アップを考えることが、移住促進や女性活躍推進、少子化対策、起業する人を増やすなど、様々な問題解決への相乗効果が高いと考えており、今日は4つ、問題提起をしたい。
- ・ 女性は男性と比較すると、ロコミ能力が高く、いい意味でも悪い意味でも、よいものも拡散するし悪いものも拡散するという特徴がある。そういった意味でも、今まだ子育てが女性中心である世の中を考えれば、子育て世代の支援の強化というのはかなり重要だと思っている。
- ・ 出生数が過去最少になったとか、去年の富山県の自殺者の増加率が全国で一番高かったとか、DVの認知件数も過去最多を記録していて、まだまだ苦しんでいる方がたくさんいる。
- ・ こういった情報について女性がうわさ話をする中で、悪いイメージで富山が広まってしまう可能性があるので、ぜひ子育て世代、ママたちへの支援を考えていただきたい。
- ・ 今日は、「惜しい！富山県」ということで4点にまとめてみた。
- ・ 1つ目は、情報を届けるのが下手過ぎる。4点全て、ほとんどここが軸になってくる。
- ・ 今回の発表に先立ち、富山県で割と発進力とかコミュニティ力を持つママたちに集まってもらい、オフレコで会議をしたら、情報が全然得られないとか、ロコミがなくて何が本当なのか分からないという意見が多かった。情報が見つからないし、分かりづらいし、理解も難しいし、進捗の共有もよく分からない、という声も多かった。
- ・ 例えば、スマホで「富山 子育て」と検索すると、県が運営している「とみいくフレフレ」というサイトが一番上に出てくる。
- ・ 妊娠したら、出産したらどんな制度があるのか調べようとサイトを開いていくと、途

中から富山県のホームページにリンクが飛んで、例えば「妊娠をしたら 補助金や制度のこと」というページでは、産前産後休暇とは産前6週、産後8週の休暇、のような辞書のような内容しか書いてない。

- ・ うちの会社で調査したときに、富山で保育園に入園するときに知りたいことを探しやすかったかどうかという問いに、大半の方が分かりづらい部分があったと回答した。
- ・ 実際、「富山 保育園」と検索すると、一番上に、富山市役所のホームページが出てくる。これも入所の基準、どういう人が保育園に入れるとか、保育料は幾らというのを調べていくが、1回目の成長戦略会議でも少し話したが、保育園やこども園に入れるときには点数がつく。
- ・ 自分の点数によって入所の優先順位が決まるが、そういうことが目につくところには書いてなくて、就労中の方、要は産休・育休中の方や、介護がある方は保育園に入れると出ていて、その一覧の下に小さくPDFのリンクがあり、それを押したら2ページ目にやっと基準表という点数、労働時間が何時間以上の方は何点というのが出てくる。
- ・ 今はスマホでサイトを見るのが普通だから、PDFは民間ではあまり使わないと思うし、一覧表を掲載するのではなく、自分の現状を入力したら点数が計算できるページを作ってほしい。
- ・ 保育料も同様に一覧表が載っているだけで、一番下に小さい字で山のように書いてある注釈を読み込まないとやっぱり分からない。落とし穴になるような部分がたくさんある。
- ・ 学童保育の情報はもっと少なく、「小1の壁」が問題になって随分たつが、あまり解決されているようには感じないというのがこのウェブから見える。
- ・ 富山のウェブサイトが問題だと言いたいわけではなく、実は全国どこも同じ状況。今回この発表にあたり全都道府県の子育てサイトをチェックしたら、どこもかわいくて、デザイン的には見やすそうだが、中身はほとんどリンク集とPDFの添付。最悪なのはリンクがそもそも切れているものもたくさんある。
- ・ 全国全部そうであれば、富山が先駆けて、見やすく、分かりやすく、親切な、ちゃんと情報を届けようという意思が感じられるウェブサイトをつくるだけで、富山の子育て環境のイメージアップが図れるということ。情報をきちんと届けることはとても重要。
- ・ 2つ目、待機児童ゼロをちゃんとやりましょう。
- ・ 黄色の枠で真ん中にあるのが、去年、待機児童ゼロと発表された都道府県。右半分の円

グラフは同じく去年うちの会社でママたちに調査したアンケート結果で、待機児童の経験がある人が全体の4分の1、待機児童が増えてきている気がするかと回答した人は7割ぐらいいる。

- ・ 待機児童になるのは、富山の場合は4つだと思う。まず、これは全国共通で、現在無職の方。出産や結婚のタイミングで仕事を辞めた方たちが子供を保育園に預けて仕事を始めようと思うと、先ほどお話しした保育園に入れるときの点数が3点しかつかない。仕事をしている人たちは6点とか8点とか、11点とかになるので、これから頑張っって社会復帰したいと思っている人たちが子供を保育園に入れるのはやっぱり難しい。保育園が決まらないと就職先も決めづらい。就職先が決まらないと点数が上がらないという八方塞がりの状態になっている。
- ・ 静岡には待機児童園という、待機児童になっている子供を保育園が決まるまで預かってくれる認可保育園がある。これを参考に、就活支援をするような保育園、要は、就活と保活を同時にさせると大変なので、どちらかだけ先に進めてあげられるような支援策が練られればと思う。
- ・ 保育園に入れたいパターンのおと3つ、これはどれも解決が難しいと思うが、1つの方法として、保育園ごとの受入れ想定人数を公表したらいい。隠す意味があまりない。
- ・ 受入れ想定人数というのは、保育園ごとに、何歳児は何人、何歳児は何人受け入れ可能という一覧表があるが、一般公開されていなくて、保育園を申し込んで待機児童になりましたという不承諾通知が届くのと一緒に、この園はあとこれだけ、丸とか三角とかの表記だったと思うが、受入れ状況の一覧が届く。これを不承諾通知と同時に送るのではなくて、もうちょっと前に分かれば対処することもできるのではと。
- ・ 去年も今年も、ママたちから「待機児童になっちゃった」という声があったし、富山県内の経営者からの「うちのスタッフが育休から戻ってこれないんだけど、どうなってるの」という困惑した相談も去年、今年と増えてきている。
- ・ 保育士さんが働きやすい富山を目指すというのも、ぜひこの待機児童ゼロ問題を解決する時に課題に入れてほしい。富山市では去年だったか、コドモンという保育士向けアプリを導入する園が幾つか出てきて、南砺市は全部入れたと新聞に出ていた。このコドモンというアプリはかなり優秀で、保護者も先生方も無駄が省けるということで、詳しくはサイトを見ていただきたいが、こういう富山市で恐らく試験的に入れているシステムの状況とかも、情報を整理すれば途中経過が見えていいのでは。

- ・ 保育士さんは保育園に入れるときに加点があるが、居住地と勤務地が市をまたぐと加点がつかないとか、保育士でなくても子育て支援員制度というのが始まって、これを持っている人は保育園で働くことができるとか、いろんな制度があるのに、まだまだ認知が足りないと感じている。
- ・ 3つ目、富山県は教育県と言われていますが、正直、私は今、自分自身の子供を見ていて、どこが教育県なのかなとちょっと疑問を感じている。全国学力テストの結果はいいのかもしれないが、では子供たちがこれから、富山で、日本で、世界で活躍できる人になるのか、夢をかなえていけるのかと言われると、そうではないと感じる。
- ・ 富山には14歳の挑戦という面白い試みもあるし、この14歳の挑戦がきっかけで自分のやりたいことが見つかったという方にも多く出会ってきたので、こういったいい事例を生かしながら、もうちょっと面白い、富山じゃないと受けることができない、恵まれた自然環境や食の環境を生かしたらいいと思う。
- ・ ベストな働き方を支える仕組みづくりについては、県単位ではできないかもしれないことは承知しているが、今、女性に限らず、会社員、正社員、パート、時短など、あるいは起業とか、複業とか、フリーランスとか、働き方がいろいろ増えてきている一方で、それを支える制度や保障がまだまだ追いついていない。
- ・ 雇用されて働いている女性は、出産のたびに多少リセットされてしまう。そのまま働き続けると言われても体は休ませるべきだし、育休を取りたいと思っても、妊娠中の状況や家族の事情によって仕事を辞めざるを得ない人たちもたくさんいるので、働く人に対する支援ももちろんだが、働くことを断念せざるを得なくなった人たちに対する支援というの何か目を向けられないかなど。
- ・ もう一つ、起業と複業が混合する働き方の場合、私も含めて、子供を1人目産んだ後に起業した女性経営者は、2人目のタイミングが分からない、自分が休んだら仕事が回らないのでという不安から2人目のタイミングを逃している方が多いと思う。実際、経営者やフリーランスの女性の半数近くが産後1か月以内に仕事を再開している。出産の翌日から病院で仕事をする人もいる。こういう現状を富山県は見て見ぬふりをしているのか。
- ・ 同じ調査で、9割ぐらいの方から、被雇用者のように、何か保障があったらいいんじゃないかという声が上がっている。
- ・ 女性で起業、もしくは複業しながら子育てもして、保育園も自宅開業の場合は点数が

下がるので入れづらい、経費にもならないというので、もっと男女が平等だったら違うかもしれないが、現状ではなかなか制度が追いついていない。選択肢は増えているが、その結果、2人目、3人目のタイミングに迷う女性がいることを知っておいていただきたい。

- ・ 最後に、私は「少数派育児」と言っているが、出産の状況が特殊だったケース。障害とか、双子、三つ子とか、あとシングルマザー、シングルファーザーとか、不妊治療とか、2人目不妊の方もかなりいる。そういった方々の声がなかなか県に届いていないと感じているので、そういう声が届くように情報の整理を進めていけたらと思っている。

【藻谷委員】講演資料に基づき説明

- ・ 今日、若者の移動と女性活躍、このテーマに絞って最新の数字を紹介したい。
- ・ 今ほど土肥委員からすばらしいお話があったが、その根底、手前にある話としてこうなっているということを説明する。
- ・ 第1回で富山は若い人はそんなに出ていっていないと説明したところ、男女の差を見ていないというご指摘を県内の方から多々いただいた。今日は、それについて最新の数字をお見せして、うわさはどこまで本当でどこからが違うのかということをご理解いただきたい。
- ・ その前に、これは2015年、6年前の古い数字だが、基礎知識として日本人全員が知っておくべき資料をお見せする。若い女性が働くと出生率が下がるのかというグラフ。
- ・ 極めて抽象的な全体の総括だが、私が内閣府の男女共同参画会議の専門委員をやっていた時期からもう12年ぐらいたつが、あちこちで話をしていると、女性を含めて非常に多くの方が、若い女性が働くと出生率が下がると考えている。
- ・ これが2015年の国勢調査で見た25歳から39歳の若い女性、学生を除くために25歳からとしたが、出産するのに中核的な年代である25歳から39歳の女性がどれだけ仕事を持っているかという率が下の軸、2015年の出生率が縦軸。
- ・ 非常に多くの方が、東京は女性が働いているので出生率が低いと思っている。全年代でみると女性は働いているが、25歳から39歳に限ると、東京は女性の就労率が非常に低い。もっと低いのが関西と東京の周辺と札幌市。
- ・ 大都会ほど女性の就労率が低く、北陸と山陰は高い。出生率は、あまりはっきりとしていないが、正の相関。つまり、若い女性が働いているほど出生率はどちらかといえば上がる傾向にある。例外は非常に多いが、少なくとも若い女性が働くと出生率が下がるということは全然ない。一番分かりやすいのが東京と島根県の対比で、日本で一番若い女性が働いている島根県は出生率が高く、若い女性が比較的働いていない東京は出生率が低い。
- ・ なぜ東京の若い女性はそんなに働いていないのか。当時、M字カーブというものが非常に深刻で、保育園が手当てできないという事情で、子育て中、仕事を離れる女性が非常に多い。かつ、これは非正規も含む数字で、その後復職しても、非正規にとどまってしまう女性が多い。そうすると、収入が低いので2人目が産めない。
- ・ 日本全体としてはものすごくはっきりとした構造なのだが、これを逆だと思い込んで

いるために、女性が働くことをネガティブに捉えている方が男女問わず大変多い。これはものすごく不幸なこと。

- ・ ただ、女性が同じように働いている県でも、出生率に大分差がある。例えば秋田は低い、島根は高い。鳥取も高い。福井も比較的高い。富山はお世辞にも高いほうではない。これは何が違うのか。全都道府県を30回以上回っている私の感覚では、そこに住んでいる女性のライフスタイルと深く関係していると思う。
- ・ 子供が増える地域はどういう地域か。ランドセルを配る地域ではない。出産直後の女性が子育てに専念できる地域でもない。
- ・ 何人産んでも、本人の体調に応じてすぐ仕事に戻りたい人は戻れる。その結果、収入が確保できて次の子供を産む気になる。人間という動物は子育ては男女共同でやるようにできていて、熊のように雌だけとか、ペンギンのように雄だけでやるようにはできていないので、共同参画で父親も休める環境をつくり、困ったときの助け、つまり学童保育とか、病児保育とか、小児科医療、これがあるところのほうが子供は育つ。
- ・ LGBTとか多様性だとかで子供を産まない人が増えているじゃないかという人がいるが、これはバーチャルリアリティーで、みんなが結婚し2人ずつ子供を産んでいる時代は日本史上一回もない。昔、人口が増えていたのは、3人兄弟、4人兄弟が当たり前だったからで、3人兄弟、4人兄弟が多かったのに人口がそんなに増えなかったのは産まない人もいたから。
- ・ 例えば「坊ちゃん」に出てくる女中の清さんは、子供がいない。社会階層が分化していて、子供を残せない人がたくさんいた。その代わり3人、4人、5人産む人もいる。平均すると2人になるようにできている。
- ・ 今も全く同じで、個人の体の事情、好み、性格、その他に応じて、産みたい人が3人以上産んでもほかの人が助けてくれて何とかなるとい状況なら出生率は上がる。自己責任で何とかしなさいというと、常識人はせいぜい2人が限界。
- ・ 保育園に入れやすいとか、収入があって他人の助け、お手伝いさんを雇えるとか、そういう状況になると3人、4人を産む人も出てくる。そういうことができるかどうかということが大きなポイント。
- ・ 残念ながら、日本中そうならないわけで、富山は出生率が低い。コロナ前の直近5年間、富山県の人口はどうなっていたのか。人口が3万人ぐらい減っているわけだが、このこと自体はそんなに驚くことではない。皆さんに理解してほしいのは若者が

減っているということ。子供も減っている。ゼロ歳から14歳が10%減っている。5年間で10%減るということは、50年続いたら100%いなくなる。このままいくと50年後に子供がいなくなるペースで少子化が進んでいる。親世代に当たる15歳から44歳も5年間に10%減っている。このままいくと50年後には富山県に44歳以下がいなくなってしまうというトレンドで現状動いている。

- ・ 50年後にいなくなると言っているわけではない。今のトレンドを放置して50年間、何もしなかったら、50年後にはいなくなるよと。今変えれば当然そうはならない。
- ・ 中年も減っていて、確実に高齢者だけは増えている。70年前に生まれた人が多いのでこれはしょうがない。だが、やがて遠からず70歳以上も増えなくなっていく。
- ・ この状況を止めるには、若い女性が出ていく状況を何とかしなきゃいけない。
- ・ 一体富山から若い女性はどれだけ出ていっているのか。コロナ前の2015年から2020年、どの県で若い女性がどれだけ移動したのか。下に計算式を書いたが、ゼロ歳から4歳児が100人いたとして30年後に何人になっているか、今の動きが30年続くとこうなるという試算。
- ・ 富山県にゼロ歳から4歳の女の子が100人いたとすると、30年後には78人、22%減っていると。つまり、4人に3人以上は、一度出るかもしれないけど県内にいる。100は切っているが、あまり低くない。
- ・ 同じグラフを大きい順に並べてみると、富山県は真ん中よりちょっと上。上位は大都市がある都道府県が多い。大都市圏及びその周辺と、沖縄。大都市ではないが石川県がなぜか上で、福井は案の定、下のほうにいる。
- ・ 若い女性が出ていくと言われる富山県は、全国平均で見ると、実は地方ではましなほう。このことはぜひご理解いただきたい。だが、30年間で22%出ていく計算なので、やはりじり貧になっていく。
- ・ 逆に出生率の異常に低い東京が205、若い女性が2倍に増える。ものすごく子育てしにくい、保育所が常に足りない東京にばかり若い女性が集まるので、日本の人口減少は加速する。
- ・ 日本の人口減少はLGBTのせいだというのは大きな勘違いで、3人、4人産みたい人が産めないから。どうして3人、4人産みたい人が産めないのか、家の広さからいっても、収入からいっても東京で3人、4人はあり得ない。そういうところに若い女性が集中するこのシステムを、何もせずに田舎の人が出て行きたいやつは出ていけと言っ

ている限り、日本の人口減少は止まらないし、田舎の減少も止まらない。

- ・ 男性はどうかというと、89%、つまり9割残っている。一回出ていくかもしれないが、戻ってくる、もしくは移住してくる。全国的に見ると、大都市のない県、大都市から遠い県では富山が一番若い人が出ていかない。富山はさすがの産業県で、実は沖縄にも勝っている。隣が栃木だが、栃木は東京まで1時間。つまり、いわゆる地方の中では、富山はさすがの男性が残る県ということ。その割に女性が出ていっている。
- ・ これが今日のポイント、今の男女の数字を引いたもので、女性が残る率マイナス男性が残る率。これが上に伸びているところは、女性が男性よりも残っていたり流れ込んだりしている。下に伸びているところは、女性が男性以上に出ていっている。
- ・ これは単に地方と都会というふうにならなくて、関西から東の地方は女の人が出ていっている。関西から西は、東に比べるとそこまで出ていっていない。沖縄だとか、あるいは佐賀だとか熊本のように、田舎なのに女性が流入しているところもある。東日本の中で女性が入ってきているのは首都圏だけだが、強いて言うと仙台のある宮城県と、そして金沢のある石川県があまり女性が出ていっていない。ものすごくはっきりしている。
- ・ これを大きい順に並べると、富山県は辛うじて栃木県には勝ったが、全国ワーストツ。ただ、栃木に勝ったとってあまり威張れない。栃木とか茨城、静岡もそうだが、東京から1時間なので、女の人が出ていっても何かあったらすぐ帰ってこれる。「お父さん、何かあったらすぐ帰ってくるからね」と言って出ていっている。それに対して、富山とか岩手とか青森は、東京から遠いのに女性が出ていく。つまり、もういいよと言って出ていってしまう。
- ・ 仕事ができリーダーシップもある女性が富山にいっぱい生まれるわけだが、出ていってよそで偉くなる。例えば真ん中ぐらいいる北海道のほうがやっぱり活躍しやすい。あとは鳥取とか高知といった女性が強い県。鳥取は女性が普通に男性と一緒にやっている。高知は明らかに女のほうが強い。佐賀は男が威張っているけど、裏では全部女が握っている。そういうところに比べて富山は非常にはっきり右にある。
- ・ なぜ男は残り女は出ていくのか。旧来の見方は、にぎわいがなくて消費環境が寂しいとか、都会に遊びに行けないとか言っていたが、そうじゃなくて現実には、やはり女性に種々の社会的抑圧がある、管理職、経営層が男ばかりで女性にガラスの天井がある、結果、輝く女性のロールモデルがないということが、もう令和の時代にははっきり出

てきているのではないかと。

- ・ 地方は大なり小なりそうだが、その中でも特にひどいのが秋田や岩手、富山というのはちょっと納得する。壇蜜さんが秋田の出身だが、壇蜜とか佐々木希がそのまま秋田にいてどれくらい輝くか。秋田で輝いている女性は結構いるので、本当は残ってほしいが、いろんな抵抗、種々の社会的抑圧がある。あんたこれしないの、あれしないの、とか、おしゃれして街へ出ると、あの人あんなのつけてとか言われる。
- ・ 男性の経営層は、女性が子育てしながらキャリアアップしていくことに関心が薄い。これが強く影響している。証明は書いていないが、全国46位などという極端な数字が出る時は、やはり県民の方が内心こうじゃないのと思いがたることが大体正しい。
- ・ 経営力ある女性が出ていく傾向、サービスに高いお金を払わない風土、これまでの議論でも指摘されていることだが、これはいないんじゃないかと、出ていくんです。いっぱいいるけど、出ていくだけ。
- ・ このことは、BtoC産業、特に（国際）観光にマイナスで、県の産業構造の革新を遅らせているんじゃないかと。
- ・ 12年前からずっと同じことを言い続けているのだが、BtoC経営をしようと思ったら、客としてのセンス・能力を磨いていない人には無理。逆に言うと、富山に女性の経営層、管理職が非常に少ないことが、富山はやたらBtoB企業は多いけどBtoCが少ないという、石川県との違いをつくっているのではないかと。
- ・ 地域おこしというものは、今は人数が足りないので、地域の人材の総結集になるので、必ず女性が前面に出てくる。少なくとも確率論的には、活躍している中心人物の半分は女性になる。実際、全国的には6対4から7対3ぐらいで女性が活躍しているケースが多い。それが仮にそうになっていない、例えばいろんな委員会でも、男が8で女が2といった状況になっているとすると、ガラスの天井で阻んでいるということ。
- ・ もうこれはブレークスルーポイントとして、経営層、役職層にアフェーマティブ・アクション（積極的格差是正）で女性を入れないと解決しない。そもそも女性が活躍できない企業に未来はないと、さすがにみんな分かってきたはず。
- ・ そして、収入が高い女性が増えることこそ真の景気拡大です。これもさすがにそろそろ分かってきているんじゃないだろうか。
- ・ 女は出産、子育てに時間を取られるから偉くならない？ そうではなく、長時間労働に耐えた人間にBtoCの企業は経営できないでしょうと。人生のライフサイクルを一通

り経験して、いろんな苦勞をした人だからこそ経営できるんじゃないか。特に若い世代の人事管理なんてのは、子育てを自分でやった人間のほうができるでしょうと。それをやらないから、過去46年間、男ばかりが役職に就いている間に、日本の出産が55%も減ってしまった。これはほぼ女性が経営層にいない中で起きた現象で、女が管理職になると子供が減るなんていうのは全く逆だということが数字上ははっきり分かる。

- ・ 経営層の方は、もうノスタルジーは捨てて、女性を使えない、女性が辞めていく、女性にいい給料を払えない会社から潰れるという事実を踏まえて、消費者の感性を持つ経営陣を増やす。そして、値上げできる商品・サービスを開拓し、賃上げで地域市場を拡大し、時短で地域の出生を拡大する、そういう前向きなビジョンを持つ。富山は家も広い、飯もうまい、南海トラフの予想震度も非常に低くて、富山のほか数県しか残らないかもしれないぐらい。噴火はあるかもしれないが。そういうところで楽しく子供が生まれ育って、楽しく暮らせる地域を早くつくろう。
- ・ そのために足りないのは、子育てを支援する人。働く若い女性の代わりに家事を受け、余った時間に心豊かに遊び、貯金を地域内で使い、後の世代に雇用と文化と手本を残す。県内の良識ある高齢男性には、是非こういうロールモデルになっていただきたい。
- ・ 大体どこでもそうだが、いかした料理だとか、いかした庭園だとか、面白い趣味というのは、大体が隠居のじいさんとばあさんが一緒になって残している。これを富山でぜひやっていただきたい。人に指図せず、権限闘争せず、路線闘争せず、人目につかないところで黙々と世間様のお役に立ち、一隅を照らす、これをやったらいかがか。口よりも手を動かして身近な人の役に立ち、地域と親族から愛され惜しまれる人となることを目指そう。
- ・ 物の分かった中高年、特に男性が増えていって、子育てのいろんな負担を分担していく仕組みづくりというのを、東京だとそのじいさんの中に変な人がいっぱいいるかもしれないが、お互い顔の見える富山の特に地方部からつくって行って、子育ての負担を社会で分担しながら女性が輝ける地域をつくるのが、富山の最大の課題である人口減少のオールインワンの解決策だと私は思う。

【高木委員】

- ・ 中村さん、今の発表を聞いて、コメントがあれば先にお願ひします。

【中村委員】

- ・ たくさんあるが、手短にお話しさせていただく。
- ・ 今回からYouTubeでも配信しているので、誤解のないような発言を心がけたい。
- ・ 私が起業した時というか、出前館の社長を引き継いだ時、お金がなかったので、銀行などいろんなところにお金を借りに行った。出前館のビジネスモデルは本当に素晴らしいと自分でも思っていたが、あらゆる銀行に断られた。理由は2つあって、社名が怪しいというのと、もう一つは、社長が女の人だからいつ逃げるか分からないと、本当に何人にも言われた。やはりこれが実態で、その辺を何とか変えていった県が勝っていくのではないか。
- ・ 私は結構しつこいので、そう言われても悔しいなと思ってかえって頑張ったが、そういうことを言われると心が萎えてしまう女性もすごくたくさんいると思う。
- ・ 先ほどの土肥さんのお話ですごく思ったのが、子供を産もうかどうかと考えたときに、未就学のときにどうやって子供を預けようというのと、あとは小学生のとき。「小1の壁」というのはほとんどの女性が知っている言葉で、小学校の子供をどうやって育てるかが非常に悩ましい。
- ・ そんな中で、出前館の従業員が、これは男女ともだが、江戸川区に引っ越しますと言ってきた。「何で江戸川区？」と聞いたら、江戸川区はすくすくスクールという独自の取組があるからだ。小学校の校舎とかを生かして、放課後、最大19時まで子供を見ってくれる学童みたいなもので、100%受け入れてくれる。こんなに安心できることはない。それで、江戸川区に引っ越す。
- ・ ちょうど子供ができるときとか、子供をつくる時というのは家族構成が変わるので、住居を変えたいというニーズがある。そういうときに皆さん江戸川区に転居するんですけど、そういうことが富山県でもできていけば流入がもっと大きくなるのではないかなと思う。
- ・ すくすくスクールでいいなと思ったのは、学校の設備を貸すだけではなくて、そこを見てくださる人が、元学校の先生だとか、元保育士だとか、地域でいろんなお世話が好きな方が自分の趣味を教えるとか、リタイアした方々の新しい働き方の一助になっ

ていること。

- ・ そういった整備をしていただきたいのと、やはり土肥さんのお話にもあったように、今、情報発信がどの県もすごく下手ですから、情報発信をきちんとやったらすごく差別化できるんじゃないのかなと。
- ・ 情報発信にも2つあり、1つは、子育て中の人が必要な情報が載っていないと意味がないので、やっぱり当事者目線での情報発信が必要。子育て中の方や、子育て経験者が情報発信していくことは非常に重要だと思う。
- ・ 2つ目、これはすごく富山県には大事だと思うが、当事者以外の県民に対する情報発信をしないといけない。特に富山県の男の人、これを言うと、また怒られるんですけど、私が何か言うと、「女の人け」って絶対言われる。
- ・ グローバルな経営者は、女性や社会人の労働力を使わないと経営が立ち行かないと分かっているから、女性でも外国人でも何でも使いたいという思いで女性差別がなくなったというのが実態だと思う。男女平等のためではなくても、女性も使い倒さないといけないからという気持ちで全然いいと思うんですけど、そうしていかないと、藻谷さんがおっしゃったような、特にBtoCのところは成り立たないと思います。
- ・ 男性ではなくて女性もすごく問題で、よく富山県の先輩女性に言われるのは、「女のくせにしゃしゃり出んとかれ」とか「私らどんだけ苦労してきたがいね」と。男尊女卑や封建的な中で、本当に苦労されてきたと思う。ですが、その方々が後輩にも苦労を押しつけるのではなくて、若い女性を応援するような雰囲気づくりをしていただきたい。旧のベテラン男性とベテラン女性が、もう富山県は変わらましょと発信することがすごく今の若い方の応援になるのではないかな。

【吉田副座長】

- ・ 中村委員、ありがとうございました。
- ・ それでは、高木委員、基調報告をお願いします。

【高木委員】講演資料に基づき説明

- ・ 土肥さんのお話はものすごく重要で、僕も3人の子供を育てている父親なので、本当に子育てがいかに大変か、その環境をいかに整備して若い人を集めるかというのとはすごく思いますし、藻谷さんの話も、マクロの数字ですごく説得力があると思う。
- ・ それらはベースとしてやるべきことで、僕からはそれに加えて、今中村さんから情報発信の話がありましたけど、その情報発信の部分、どう富山を価値高く見せていくかというところを、今回「広報と移住と観光」というのをテーマにお話しさせていただく。
- ・ 僕はNEWPEACEという会社をやっている。富山には18年間いて、早稲田大学に入るタイミングで東京に出て、博報堂に1年勤めた後、独立して仕事をしている。スタートアップや新しい市場をつくる企業のコミュニケーションやクリエイティブが専門領域で、僕は「ビジョニング」と言っている。
- ・ 最初の回でも話したが、ブランディングって皆さん何となく言うと思う。TAMのブランディング指標とか。それも別に間違いではないと思うが、ブランドは資産のあるところが強い。例えば近くだと金沢とか京都とか、パリとか、そういう歴史的資産があるところが価値を積み上げていくことがブランディング。これに対し、スタートアップとか、新しいことをやっていく存在というのは、そういう積み上げていけるブランドがたくさんあるわけではなくて、どちらかという、ビジョンを掲げてそこに仲間を集めていくというようなこと。これは今、いろんなものが変化していく時代なので、すごく有効で、社会をこういう方向にしていこうよ、こういうことを大事にしていこうよということを掲げて、みんなを巻き込んでいく。これを僕はビジョニングと言っている。
- ・ 企業でもユーザーに向けてはマーケティング、社員に関してはHRと言われる採用などのコミュニケーション、メディアに対してはPR、株主に対してはIRなど、それぞれコミュニケーションが分かれているが、今はSNSなどで一貫性が見られている時代なので、ビジョンを起点に一貫したコミュニケーションをいかに実践していくかというのがすごく重要。今回は、ビジョンの提案ではないが、そういう考え方をベースに富山の話をしたい。
- ・ 僕は富山に18年間いたが、その後ほとんど富山との接点がなく、たまに年末年始に帰るぐらいだった。去年コロナで大変だったときに、高校の先輩方とコロナ寄付基金の

発起人としてやらせていただいた。ここにいる藤野さんにもご協力いただいたり、これがきっかけでいろんな人と会うことができ、そこから富山との関わりが急にまた戻ってきた。

- ・ その中で、富山がすごく面白くなってきているなと思ったし、僕自身もっと貢献したいと社会人を10年ぐらいやって思うようになった。
- ・ 今回の発表のスタンスとして、18年間お世話になった富山のことが大好きです。ただ、戦略を考える上では課題が重要だと思うので、今、土肥さんと藻谷さんからも課題がたくさん出て頭が痛いと思っている方も多いと思うが、僕も外の若者の目線ということで書かせていただく。
- ・ 今回のテーマは、移住戦国時代においてどのような取組を推進すべきか、また、その際の課題は何かということだが、過去の発表の中にもう答えはある。例えば藤野委員の、「これまでの一流というもののループが別に成功者じゃない」、「ルールチェンジャーの育成が大事」、「多様性ある教育や場をつくっていくのが大事」とか、中村委員の「新しいスターをつくっていくことが大事」という話、安宅さんも「マシンのように受験勉強に強いような人ではなくて、あらゆる変動の状況下の中で価値を出せるような人こそがこれから価値を生み出す」と。
- ・ ざっくり言うと、新しい価値を生み出せる人に富山に来てほしいということだと思うが、現状は真逆。今回、事務局の資料を見てすごく面白いと思ったのが、高校生アンケートで、将来富山に住みたいと思いますかという質問で、「ずっと住みたい」13.5%、「一度は県外へ出ても、富山に戻って住みたい」40%。5割強が富山に住むことを希望していると書いているが、ほぼ富山を出たことがない高校生で「ずっと住みたい」が10%台って相当悲しい現実で、危機的状況だと思う。
- ・ 首都圏で就職した女性の意見交換、これも定性的なデータだが、「固定観念が強くて、やる気のある人に対して冷ややかな目が多い」、「女性差別を感じる」、「キャリアに対しての固定観念」とか、「すてきな感じではない」「流動性が低い」とか、活躍の意欲ある人ほど行きづらい場になっているのが富山県。
- ・ 実際、県民意識調査で、62項目のうち、県民が重要だと思っているのは、子育て・教育とか、医療、福祉。それは分かるなと思いつつ、重要度が低いと県民が考えているもの、例えば57位が「未来を拓く起業チャレンジへの支援」。他に順位が低いのは「デザイン」、「国際的な取組」、「選ばれ続ける観光地づくり」、「中心地のにぎわい」。「芸

術文化の振興」は最下位。「交流人口の拡大」は58位、「グローバル社会の地域づくり」も60位。これは重要だと思う項目が軒並み低いという印象。

- ・ これは知人に聞いたリアルな富山観だが、今の暮らしに困っていないで、それが当たり前。当たり前暮らしのよさに気づかないまま、テレビで見る華やかな東京に憧れ、富山には何もないと思い込み東京へ出る。田舎の劣等感を抱えたままだから戻らない。男尊女卑で女性の地位が低く、お母さんは娘に、あなたは東京で自由にと言って送り出し、戻らなくていいと言う。
- ・ 一方、県内にとどまっている人たちは、正社員比率が高く、失業率が低く、生活保護は全国で一番少ない。保育所もあり世帯所得も極めて高く、貯蓄額も全国有数。真面目で外を知らず、海外旅行もしない。20代のパスポート保有率は全国最下位レベル。金があっても遊びを知らない。外を知らず県内を楽しまないから富山には何もないと思いつむ。
- ・ なんで移住促進をやらなきゃいけないの？ と思っている人が結構いるかもしれないが、先ほどの藻谷さんの話がまさに答えて、このままでいけば50年後、若い人がゼロになってしまうから。
- ・ 移住促進をマーケティングやコミュニケーションと考えると、誰とコミュニケーションするのかというのがすごく重要。いわゆるターゲットだが、富山に新たな価値を生み出せるような若者、これは事業としてもそうかもしれないし、ある種、子供というのも新しい価値だが、そういう人たちだということをきちんと決めるのが大事。
- ・ そうすると、最初の問いは、「価値を生む若者」戦国時代に富山はどう選ばれるか、変われるのかということだと思う。
- ・ 移住と一口で言っても、移住をコミュニケーションするのは広報だし、移住の入り口になるのは観光なので、これは切っても切り離せない。
- ・ 県では移住の施策を体系化し、「くらしたい国、富山」とか、いろんなロゴマークを作って事業をしているが、現実には、富山の認知度は低下傾向で情報接触度も落ちていつている。富山の認知度は44位なので結構下位。やるべきことはやっているが、なかなか難しいというのが現実。
- ・ その対策として、YouTubeの利用時間が増えているからYouTubeでもっと発信しようと書いてあるが、ここが一番競争が激化しているゾーンなので、難しいと思う。実際インスタグラムのフォロワーをみると2,000人。ツイッターは2万7,000人ぐらいだが、Y

ouTubeは1,500人。これは仕方なくて、SNSは大企業や大都市でさえ苦戦しているので、同じやり方でやっても勝ち目はない。

- ・ そんな中で、僕が今日提案したいことは、「観光やめましょう」。
- ・ 前回ポートランドの話があったが、いわゆる近代観光みたいな20世紀型の観光をやるのは、移住の話にもつながるのだが、そもそもナンセンスではないか。観光産業はブランド産業。ザ・歴史文化のあるところが勝つゲーム。しかも富山は観光で飯を食う人が少ないので、観光振興が成立しづらい状況がある。
- ・ 僕は企画を考えるのが本職なので、課題提示だけじゃなく、富山ならではの勝ち筋、どうしたらいいかも考えてきた。
- ・ 富山には日本一の基礎がある。水というのは本当に基礎だと思っていて、名水百選が8件というのは日本トップクラス。東京とかに出ても、みんな水道水が飲めるんだみたいなことを自慢しがちなので。
- ・ 定住先・半移住先としての富山の魅力は、自然、おいしい魚、米、水、あとは災害が少ない。ベースが豊かだからこそ幸福度の高いライフスタイルがあるので、そういう項目自体を自分たちからプッシュしていくほうがいい。一つ一つの要素というよりは、幸福度の高いものをちゃんと打ち出していくのが大事で、幸福度ランキングが福井に僅差で2位だということも、漠然と認識されていると思うが、こういう指標自体をもっとコミュニケーションしていくべきなのかなと。
- ・ 幸せというのは抽象的で測りづらい、指標になりづらいと思われるかもしれないが、世界や日本で、「ウェルビーイング」というキーワードで、それ自体を1個の指標にしようという動きが出てきている。GDPとかSDGsの次だとも言われるが、一人一人のウェルビーイングを価値軸にしていくことが大事なのかなと。自然とか個々の要素より、「幸福度」を発信していくことが大事だと思っていて、そこをキーワードにできないかと。用意された観光資源、建物とかではなく、幸せのヒントがある県ということで戦っていけないかなと。
- ・ 幸福先進国というと北欧が思い浮かぶと思う。ここでも新たな動きがあって、2017年にデンマークのコペンハーゲンでは、観光の終焉、THE END OF TOURISM という、私たちが知っている観光はもう終わりという宣言文を出した。
- ・ コペンハーゲンは人魚像が有名で、みんな人魚像の写真を撮って帰るが、そういう観光地はもうやめると。訪れる人々を観光客としてではなく、一時的な住民として歓迎

しよう、観光資源は人魚姫ではなくコペンハーゲン市民で、それを一緒につくっていかうと宣言している。

- ・ LOCALHOOD FOR EVERYONE をビジョンに掲げて、幾つかの視点で提案をしていて、例えばコミュニティディナー、定期的に市民と一緒に御飯を食べられる場をつくったり、平日の公園でピクニックやバーベキューといった場のよさをもっとつくっていったり、コペンハーゲン運河での遊泳とか、どんどんリノベーションしてスモールビジネスを起こしてくださいということをやっている。
- ・ 「観光の終焉」から考えた次の観光のヒントとしては、観光客として扱われたい観光客は減っていると思うので、コミュニティーの一員として接する。観光モニュメントでは気持ちのつながりは生まれにくい、市民の生活こそが観光資源であって、市民がつながりを生むのだと。マスメディア的なキャッチコピーを届けるより、市民一人一人のストーリーが伝わっていくことが大切で、その体験がブランディングの成功指標だということ。
- ・ 富山県の広報アカウント、インスタグラムを見たときに、ザ・観光地というのがこれでもかと並んでいるだけで、人々のライフスタイルが見えなくて、すごく特別な瞬間というかハードを見せている感じがする。
- ・ ポートランドのSNSを見ると、人々のライフスタイルがそこにある。生活を共有している。
- ・ 2018年の調査で、富山のインスタグラム利用率が1位だということだが、アカウント単体で勝負する必要はない。みんなが発信していくほうがよっぽどSNS向きで、そういうふうにはできないかなと。
- ・ 僕の地元は新湊の内川沿いで、いつの間にか「日本のベニス」と言われて観光地化している。住んでいるときはまさか観光地になるとは思わなかったが、今行くとすごくすてきな空間だと思う。
- ・ ただ、何か違うなと思ったのは、例えば遊覧&ティータイムというツアーで、川の駅の新しい建物でコーヒーを飲むのをプッシュしているが、富山にこういうきれいなコンクリートは求めていないと思うし、内川沿いで町家をリノベーションしてお店をしている人たちも増えていて、こういう人たちとの交流機会をもっと県がバックアップしてつくっていくほうがよっぽど記憶に残ると思う。
- ・ 僕自身、アムステルダムに行ったときに、運河がたくさん流れているところで、アム

ステルダム市民の方がチーズとワインを持って船で迎えに来てくれて、この道は最高だよ、と案内してもらったのがめちゃくちゃ記憶に残っていて、有名な場所へ行くよりも一番記憶に残っている。何かそういう体験をつくっていけないかなと。

- ・ 飛騨古川で僕の友達がサイクリングの事業をやっているが、これも何てことない自転車を借りてその辺の道を行って桃を食べたりすることがすごく楽しい。都会にはない体験がそこにあって、記憶に残っている。
- ・ 暮らしそのものが最高のコンテンツだということを見直していかなきゃいけないと思っていて、中学生の頃に、朝5時に起きてホテルイカを詰めるバイトをしていた話を東京ですると、みんなやりたいと言う。そういうことをもっと出していけないかなと。
- ・ 考え方として、もっと日常の中にあるものをおすそわけするような発想、かまぼことかもおすそわけの精神から生まれているものだが、そういう発想が必要かなと。県内の人たちへのコミュニケーションとして、「しあわせ、おすそわけ」を合言葉にできるといいのでは。
- ・ 立山と富山湾、高低差4,000メートルの大自然に包まれた世界。海から山が一望でき、山にいても新鮮な海の幸を味わえる。蛇口をひねればミネラルウォーター。毎朝の御飯がホテル品質——ちょっと言い過ぎだけど。一流のお店や宿に行けば、東京やニューヨークにはない感動が待っている。富山の人も当たり前過ぎて気づいていない、幸せが転がっている。日常の中にある幸せのヒントを、外の人におすそわけしていこう。おすそわけが人のつながりを生み、富山のファンを広げていく。背伸びした観光ではなく、自然体なコミュニケーション。「しあわせ、おすそわけ」、これが次の富山をつくる合い言葉。
- ・ そういうようなことを掲げて、富山にあるものをいかに共有していくかがすごく重要になってくるし、富山らしい戦い方になっていくのかなと。
- ・ 関係人口というのは、観光以上、定住未満、移住未満とか言われたりするが、そういうものをすごく大事にしていくべきで、富山が人口100万人を切っても、関係人口100万人の県になるということを言っていくことが大事なんじゃないかなと。
- ・ 戦術としては、スマホ・SNSによる一億総メディア時代なので、一人一人の体験がちゃんとストーリーとして重なって出ていくことが大事なので、コミュニケーションの構造も考えないといけない。
- ・ 富山県は、富山県民と外の世界にそれぞれコミュニケーションしていると思う。県民

に対しては、広報として政策などを打ち出しているが、一緒にやっ払いこう、外の人に発信しようという危機感はつくれていない。外の世界に対しても関係人口をつくれなくて、推定関係人口も調査によると42位と低い。

- ・ 県内向けと県外向けで、全く別のコミュニケーションになっている。この間にある立山よりも高い壁をどうしたら越えられるのか。この資料はセンスのある若い女性などに、富山のどこが気になる？ と聞くと上がってくるスポットで、僕が東京の友達を連れていっても、すごくよかった、また行きたいと言ってもらえる場所を列挙したもののだが、そういうところの仕掛人って、一回外の世界を経験して富山の魅力を再編集しているような人たちばかりで、実際そういう地方にクリエイターとかが来ると、新たな人のつながりが生まれてコミュニティも育っていく。
- ・ 佐賀は地方ではあるが、チームラボをいち早く呼んだことで、クリエイターとの交流がめちゃくちゃ生まれているし、福岡でもこういう編集者のような人が出てきて、流れが変わってきている。
- ・ 「カタリスト」という触媒する人、編集者や出戻った人たちもそうかもしれないが、外の世界に直接コミュニケーションするというよりは、カタリストにもっとコミュニケーションしていく。その人たちが外の世界とのつなぎ役をやっていくというほうがよほど筋がある。
- ・ 富山の可能性に改めて気づいた出身者や、逆境や制約を楽しめるクリエイター、子育てを機に新しいライフスタイルを模索・実践するようなカタリストたちをいかに中に引き込めるかが大事。県のアカウントを増やしてSNSに発信力を持たせるというのは難しい。
- ・ カタリストの人たちに、いかに幸せの実験地区として開放できるか、いかに新しいことをやってもらって体験してもらうか。そこを富山としてやっていく。発信は、彼らにやってもらえばいい。
- ・ 富山県庁の体質も変わる必要があると思う。さっきBtoB、BtoCという言葉が出たが、富山県は製造業の国で、富山県庁もすごく製造業的思考だと思う。今話したやり方は情報産業的なので、そうふう考え方の構造を変えていかなきゃいけない。製造業は作ったら終わり、情報産業は届けるまでが仕事。製造業は縦割りでクローズド、情報産業は横の連帯でオープン。
- ・ 県の組織でも、広報は知事政策局、移住と観光は地方創生局で、連帯がとれていない。

県内のコミュニケーションは広報がやっていて、観光は観光、外の人をいかに連れてくるかとやっていて、横の連帯があまりつुकれていないと思う。

- ・ 日本橋とやま館でも、富山の人に来て、体験イベントなどをやっているが、この辺をもっと連帯していかないと、暮らしの魅力とか「しあわせ、おすそわけ」はできない。
- ・ 「広報」と「移住」と「観光」で「広住観（こうじゅんかん）」をつくらないといけな
いが、現状はばらばらなので、広報と観光と移住を三位一体でリードするブランディ
ング室みたいなものを立てて統合していくことが大事なのかなと。
- ・ カタリストの視点で富山を編集したり、若い人や民間企業を巻き込んでいくのもそう
だし、一体化することで相乗効果をつくって、内外に同じ富山ブランドを形成する。
観光客向けと県内向けを分けるのではなく、同じイメージをちゃんとつくっていくこ
とがすごく重要だと。
- ・ 中の人賛同・熱狂しないブランドづくりは絶対うまくいかないで、そういうこと
を中からじわじわとやっていけるといい。
- ・ まとめると、富山県全体で近代観光から脱却して、日常の幸せに向き合い、シェアし
ていくことで新たな価値をつくる人たちと連帯していく。ばらばらになっている広報、
移住、観光を統合するブランディング室を新たに設置して、富山のコミュニケーション
を構造から変えていく。これができれば、これからの移住戦国時代に価値ある人を
呼んでいけるようなことをつくっていけるんじゃないかと思う。

2-② 意見交換

【藤野委員】

- ・ 3名のプレゼンテーション、また刺激的で、委員のプレゼンテーションのレベルや問題意識が、私も中央官庁の政府委員もしているが、全く引けを取らないどころか、刺激度という面で見れば、実は中央官庁を超えているすごい内容。
- ・ 特に前回の、安宅さんが僕は富山県が大嫌いだという発言とか、場を凍らせるような話も出て、でも、これはものすごくいいことだと思う。
- ・ 結局、若い人や女性がいなくなっている原因は、今の富山県のカルチャー。この会議でも、委員がそれぞれの形でその問題を提示している。ところが、行政でやろうとしても、最大の受益者である県民にアンケートを取ってそのとおりにやると、県民の行動変容を促すことができないというジレンマを抱えていることが今回非常に分かった。
- ・ 例えば新産業をつくろうとか、新しい視点の中でそういう会社を育てようとしても、先ほどの高木さんのアンケートでも、それがほぼ最下位で、実は全然、富山県民に求められていないということ。
- ・ これをどんな視点で変えるのか。要するに、安宅さんみたいに出ていった人たちがなぜ出ていったのか、なぜ嫌なのかというところの問題を解消しないと、なぜ集まりたくないのか、なぜ富山に行かないのかというところに目を向けないと、結局、この問題は解決しないどころか、どんどん悪化する一方。だから、このメンバーで、富山県にあって富山県民が足りないところを何らかの形で提示しなければいけない。
- ・ そのときに、どうやってコミュニケーションするのか。一つのアイデアだが、未来の富山県人、要は10年後の富山県人という視点が結構重要なのかなど。今ではなく10年後の富山県民や富山県のことを考えて、どうすべきなのかという視点でコミュニケーションしたらよい。
- ・ もう一つは、政策について、結局、委員の誰もが言っているのは、総花的な最大公約数的な政策では全くうまくいかなくて、ある種、先端的な、少しとがったことをやるべきだということ。
- ・ 全ての委員の話に共通しているのは、富山県の隙間を重要視することが大事ということで、もう出来上がっているカルチャーであったり文化に正面から切り込んでいくのは抵抗も大きくて難しいが、まだやっていないこと、やれていないところ、手薄なところから、この会議で話しているようなことを実験的にやるのがいい。

- ・ 高木さんの意見にかなり賛同で、内川とかヘルジアン・ウッドのような、内川は前からあったところを編集の妙で新たな楽しい生き方の場になっていくということと、ヘルジアン・ウッドだと、何もないところにむしろ富山県らしさの楽しさと、それから県内、県外の人々の楽しさを新たなものとして挑戦するということがあるので、そういう隙間をうまく利用して、そこを重点的に楽しい場にして育てていくことが大事だと思った。

【前田委員】

- ・ 冗談半分だが、カタリストの高木新平さんに富山のビジョニングを3年間お任せするとか、土肥さんに女性と働くママの支援事業を任せてしまうのがいいんじゃないかと思ってしまった。
- ・ 3年間と言ったのは、行政には単年度予算の原則があって、どうしても1年間で、この予算で何かロゴを作ったりサイトを作ったりという中で、横串どころか、ちゃんとした歴史的な縦串を作ることがなかなかできていない。ビジョニングの前にブランディングまでもぐちゃぐちゃになってくるので、民間の人と連携してもいいので、3年から5年間ぐらいの中長期で人に任せることが大切。これが成長戦略会議のこういったメンバーを集めている一つの大きな意義だと思う。
- ・ ブランディング室というのは以前からも言われていたと思う。官民一体でもいいので、ブランディング室をつくり、3年間から5年間、多少の振れ幅があったとしても予算を取って続けてやることが大事。
- ・ これも冗談交じりだが、現在、富山はやっぱりすごく住みやすいし、課題や問題が見えづらいというところもあって、未来の課題や問題を予測しようとしても、当事者である県民や住民がなかなか当事者意識を持ってない。そうであれば、例えば、10年後の富山県、20年後の富山県を予測した映画を作る。それで、今はいいけど、本当にこのままでは、10年後、20年後はちょっとまずいと思わせる、もしくはその課題を解決していくと、こんないい未来が待っているというようなハッピーエンドの映画を作るのも非常に共感を呼んだり、当事者意識を高める一つのコンテンツになると思う。

【吉田副座長】

- ・ 私もぜひ高木委員にブランディング室のCBO（Chief Branding Officer）を務めてい

ただきたいと思う。

【藤井委員】

- ・ 私も皆さんに全く同感。前半の子育ての件に関しても、後半のブランディングの件に関しても全く同感で異論はない。
- ・ 重要なのは、その2つをどうつないでいくのかということ。「しあわせ、おすそわけ」でブランディングするのだが、前半の子育ての話では、富山は幸せじゃないと。その矛盾をどう考えるか。今ある富山の田舎の暮らしとか、人々の緊密な関係とか、そういったライフスタイルを見せていくということで、ある程度「しあわせ」のブランディングはできるが、1枚中に入り込んでみると、一番女性が出ていってしまう、若い女性のウェルビーイングが低い、幸せでない県だという現実がある。だから、ブランディングをやりつつ、前半で土肥さんがおっしゃっていたようなことは手当てをしていかななくてはいけない。それを両輪でやっていくことが重要で、その両輪で5年後、10年後を見据えてやっていくことが重要だと。
- ・ 先ほど藤野さんから未来の富山県人というお話があったが、まさにそこだと思う。ウェルビーイングというのは、主観的な感覚を中心とした幸せだが、今日の前半のプレゼンによれば、今の富山県の人たちは、若い女性が住みにくい主観、価値観を持っていることになる。だから、今の人の主観をベースにウェルビーイングというと古い社会の繰り返しになってしまう。それを藻谷さんが発表された数値や、先ほど出た将来のディストピアのビジョンなどを見せて県民の理解を求め、5年後に富山がどうあるかをみんなで議論しながらウェルビーイング政策をつくっていく必要がある。
- ・ 今いる人にとっては多少アンコンフォータブルな部分もあると思うが、やっぱりそれがないと富山の将来の成長というのはないんじゃないかと。
- ・ 富山のウェルビーイングは高いとも言われていて、経済指標や、女性の社会進出率、住宅面積などがトップなのに、女性が暮らしにくいという声がある。ということは、未来社会の価値観を見据えてウェルビーイングを設計する必要があるということ。
- ・ 段階的にフェーズで考えていくことが必要。この会議でも今まで、富山にIPOできるようなベンチャーをつくって、富山にシリコンバレー的なものをつくりたいという話や、里山資本主義的な話、関係人口の話などがあったが、それらをどういう順番でどう達成していくのか、フェーズで考えていく。

- ・ まず若い女性のウェルビーイング施策をつくることで、柔軟な働き方ができるようになっていく。柔軟な働き方ができるようになっていくことで、例えば個性的なショップだとか、アーツ・アンド・クラフツだとか、里山資本主義的な身近なライフスタイルをより柔軟にクリエイティブにしていく人たちが生まれる。ライフスタイルビジネスは、女性による起業が多いと言われる。そのようにして地域循環経済圏の素地ができていく。
- ・ それだけではIPOするようなベンチャーは生まれませんが、そうすることで、クリエイティブ人材やベンチャー人材が集まりやすい環境が整う。徳島県の神山町であったような、ライフスタイルからITへという循環ができていって、その中でさらに都心との仕事もリモートマッチングなどをやりながら、さらに柔軟な働き方を進めていく。
- ・ それと同時に、ベンチャー企業ばかりでなく、既存の一般企業においても、女性の健康維持や健康経営、管理職登用における男女平等、男性の家事育児参加の奨励などは、ものすごく重要。それらを総合的にやることによって、最終的に家族で富山に移住する人が出てくる。
- ・ いくらライフスタイル型の観光がいいからといって、1週間富山に住んでアーツ・アンド・クラフツっぽいことをやったとしても、移住となると、家族全体の教育や福祉といったところが一番問題になってくる。なので、そこをちゃんとやれば、将来的に新しいソフトウェア産業とか情報、クリエイティブ産業を中心としたクラスターをつくることも夢じゃないと思う。この全体観のタイムラインをもってやるのが重要で、それが5年、10年後。
- ・ 教育改革も、やはり5年、10年かかる。富山は学力が高いと言われるが、特段個性的な教育システムがあるわけではないと思う。例えば教育先進県と言われる福井県や秋田県は、現場の先生方を支えるいろいろな仕組みを作りつつ、彼らと一体となって、教育長に優秀な人材を呼んできたり、きちんと予算をつけたりしている。そういう人事的・財政的トップコミットメントを県庁、県知事が出すことによって、教育は変わる。5年、10年かかるから、5年後、10年後にまさに藤野さんがおっしゃった未来の富山県人をつくるような改革ができていくんだと思う。

【中尾座長】

- ・ 大変勉強になった。富山の女性についてちょっとお話ししたい。私は今も女性のリー

ダーたちの研究会を3つぐらいやっている。男の経営者でもやっているが、やっぱり富山は女性が優秀。間違いなく。ほかをたくさん知っているわけではないが、私は17人で会社を始めて、全国で8,000人ぐらいになって、各地で会社を起こして女性を採用してきた。区別はしなきゃならんが、差別したことはないし、昇格試験が同点なら原則女性を上げると。子会社を8社持っているが、女性社長が2人。みんな本当に優秀ですね。本質的に、伝統的にも、私は歴史的に富山の女性というのは頑張り強くて優秀だと思っているが、やはり、富山の男性社会というか、女性を対等に扱う、待遇するという面では遅れているんじゃないかと。これから一番大事なことは、何%女性を上げるといふわけの分からんことはちょっとまずいので、優秀な女性を登用していくあれをつくっていかなければ。

- ・ それから、育児の問題も、保育所の問題。私も社内に保育所をつくったことがあるが、もう少し企業がグループ、地域の団地内で保育所をつくるとか、そういうことも支援をしていかなければと。
- ・ 私は反省をしているが、子育ては女性だけの仕事じゃなくなったということを富山県の中で、まだ男性はそうなりませんけど、もう少し平等と一緒に育てていくという考え方を持って、女性の活動、活躍の機会をもっと後ろから支えていくという風潮を、これも経済界として大いにやっていかなきゃならない。
- ・ もう一つ、女性が外へ行く、これは大学の定員があるから当然だが、もう少し女性リーダーが育っていくために、何かユニークな、もう一つぐらい女性を、女性だけじゃなくていいが、中心的に受け入れていく専門教育機関があつていいのでは。県外の大学に行ってそのまま戻ってこないわけだから、そういう受皿も必要だと。
- ・ 私は99組の媒酌人をやったが、なぜこんなに最近結婚がなくなって、遅くまで結婚しないのかと考えると、やっぱり生活のレベルも昔から見ると上がっている。それに対する収入の問題とか、育児の問題だと思うが、そういった意味で、移住してくる皆さんの、あるいは生活保護世帯もそうですけれども、生活を側面的に支える。例えば移住してくる人の住民税はしばらくもらわないとか、できることかどうか分かりませんが、そんなことも考えていったらどうか。
- ・ 県立大学の客員教授を長くしている。一回お話ししたが、企業が大学に卒業論文のテーマを出す。最初は300社ぐらい後援会をつくって、90ぐらいの提案が出て、四十幾つが採用されて、卒論を教授と一緒に書いて、もちろん卒論発表会もやった。その卒論

をやっているときにその企業を訪問してそこで勉強するということがあって、そのまま就職が決まるということが、県立大学は日本でも一番早く100%になる大学と聞いている。これはほとんど男性が多いのだろうが、そういう意味で、大学と経済界の問題もあるが、富山で受け入れて富山で働いていただく風土を経済界からも少しつくっていく。そのためには、男性がもうちょっと育児に入っていかなきゃならない。

- ・ 私は家で今のコロナの働き方を実践しているが、在宅など、コロナ禍での仕事の仕方でも、あまり生産性を落とさないでやっていけると思う。
- ・ 委員からたくさん意見をいただいて、今1つ夢で考えているのは、会社をみんなで幾つか起こしていきたい。魚が獲れて、農業があって、非常に環境がいいわけだから、6次化と言われても本格的なものがなかなか出てこないが、そういう加工業も加えて、しかもそれを卸売業、販売、商業も入れた総合的な企業もつくっていかなきゃならないと。人が戻らないというのは、やっぱり働く場所が直接的な原因になっているわけだから、そういうこともぜひ考えていきたい。
- ・ 大学との連携、富山大学でもやっているが、女性を引き止めるような魅力的な高等専門教育機関を何か起こしてはどうか。優秀な富山の女性をもっともっと活用していきたい。
- ・ たくさん東京の委員から意見をいただいたので、大いに参考にさせていただいて、50年後は、藻谷さん、何か暗いことを言われたが、そんなめっちゃくちゃなことにはならないように、よろしく願いしたい。

【土肥委員】

- ・ 先日、富山大学で地方創生に関する講義を1コマさせていただいた。ママスキーはこんな会社でこんなふうに来てきたという話をしたら、学生からの質問で、どうしてママスキーがあってパパスキーはないんですかと。
- ・ 質問してくれた男の子は本当に純粋に、今、男女平等とかジェンダーの問題がある中で、何で今どきママとうたっているんですかみたいな質問だった。その質問の影響もあって、講義が終わった後の百数十人のレポートの中に、なぜパパスキーがないのか、そこに対する思いが結構書いてあった。
- ・ それを見たときに、私ぐらいの世代ではまだ男女の差を感じながら生きているけど、講義を聞いていた大学1年生の子たちは男女平等がもう当たり前の考えとして育って

きているんだと。

- ・ 女性が一生懸命働く、遅くまで働くとか、いっぱい成果を上げるとか、そういうことに価値を置く人もたくさんいるが、家庭、プライベート、仕事のバランスが取れた状態で生きているほうが格好いいよねという価値観を持つ人、特に女性はそういう人が多いと思うが、そういう女性がたくさんいたときに、逆に男性が、女性ばかりそれが許されて僕らは働いてばかりだみたいな逆差別みたいなことを感じてしまう可能性もあるかもしれないと、レポートを見ながらちょっと思った。
- ・ もう目の前にいる次の世代の子たちは、SDGsとか、ウェルビーイングとか、私たちが目標だと考えていることが常識だという人たちなので、そういう人たちが社会に出て、現実とはそうじゃなかったとなると、そのギャップで離れていってしまう、そのきっかけになり得る。
- ・ 先ほどの話の中で、5年とか10年とか3年とか言われて、時間がかかるのは分かっているが、今の大学1年生が社会に出たとき、もしかしたら今4年生の大学生が社会に出たとき、すぐ来年にはそのギャップにぶち当たってしまう子たちがいるかもしれない。私は結構せっかちなのもあって、試験的にでもいいので、とにかく早く何か動き出せたり、今すぐ変わらなくても、こうしていこうと思っているという姿勢が県民にきちんと伝わるような行動を起こしていけたらいいなど。次来る子たちが社会に出てがっかりさせないようにしたい。

【藻谷委員】

- ・ 中尾座長から、50年でなくなるなんてことはないよねと、そのとおりで、50年この同じトレンドが続くということは、よほど怠慢に怠慢を重ねないとあり得ない。人間は本来、10万年続いてきている生物で、遺伝子は何も変わっていない。つまり、環境さえそろえれば、一定数の人は子供が欲しいし、一定数の人は3人、4人欲しい。1人で十分という人もいる。一人も要らないという人もたくさんいる。保育所はしたいけど、自分の子供は要らないという人もいる。全部合わせると平均2人になるようになっていて10万年つながっているのだから、ここ数十年がちょっと狂っていたということ。その狂っていた状況を急いで戻さないといけなくて、気がついて止めるタイミングによって、人口が半分になっているか、2割減で済むか、2割しか残っていないか、結果が変わってくる。だから、今がそのタイミングだということなんだと。

- ・ 今の男女の話は幕末の身分差別とそっくりで、幕末に私が生まれ変わって、百姓に優秀な人が幾らでもいて、将来の日本のリーダーは百姓出身ばかりになると言っても誰も信じない。でも現実にそうなる。それと同じで、現在でも皆さん、男女の身分差別の中で生きていて、女性の可能性とかイコリティについて、上の人ほど分かっていない。
- ・ これは、時が解決するというか、10年、20年、30年たつとはっきり分かる。ですが、変化は東京が多分一番遅い。なぜならば男子校と女子校が分かれているからで、青春の非常に貴重な時期に中高一貫で男女を分けるという、世界にまれな愚かなシステムを守っている東京や大阪のほうの変化が遅くなる。若いときに男女を切り結ぶという経験をしていないから基本的にできない。富山はその点、公教育がしっかりしているから、東京などよりは早く変化ができるはず。思い立ったら吉日で、それを今日から進めないといけない。
- ・ 観光についても一言だけ。高木さんが内川ご出身ということで大変感動したが、あれを日本のベニスと言い出したのは私。同じスケールで全く同じ時期にできた同じような原理のまちであって、そして日本としてのベニスの美しさがあると。当時、誰一人いなかった。ところが、今御紹介いただいたような面白いことをする人が20年越しにぽつぽつ増えてきたんですが、あれを一生懸命増やしてきたのは、御存じないかもしれませんが、実は富山県庁。
- ・ もちろん地元の人たちが頑張っているのだが、裏で一生懸命育ててきたのは県庁の観光担当。全国の県と付き合っているが、これは富山県だけだと思う。旧来の観光事業者をどうこうではなく、ああいう草の根の住んでよしの世界をつくるのが大事だということに気がついて一生懸命注力してきたのが富山県の観光担当で、人材的にも能力的にもすごく先を行っている。まさにコペンハーゲンが今やろうとしていることをやろうと気がついている人たちが県庁にいますので、ぜひ後押しをしていただきたい。
- ・ 高木さんが本当に的確にお示しされたが、富山県の中にいる人がこうなっていて、外に行った人がこうだと。現代のある種、悲劇というより喜劇で、すばらしいところにながら文句を言っている人たちと、すばらしいところを捨てて不幸な状況になりながらよかったと言っている人たち。これを崩すのも実は新しい観光だと。
- ・ よさに気づいた移住者を増やすことで、地元の人に、時間はかかるが、富山のよさを外の目で気づいてもらう。そのためにも国際観光はますます重要だし、特に、欧米の

方が富山は日本の中で一番ましだと言うことがすごく重要だと思う。

- ・ 先般、政権のブレーンとも言われるアトキンソン氏と仕事で会ったときに、彼が地方は駄目だと言うので、そんな駄目ですかと言ったら、いや、素晴らしい地方が日本にもあると。どこですかと聞いたら富山だと。
- ・ 地方は駄目だ、駄目だとあれだけ言っているのに、富山は東京より生き残るだろうみたいなことを急に言われるので驚いた。これが放送されたら、そんなこと言ってないとおっしゃるかもしれない、いや、おっしゃったと思うが、皆さん、やはり世界標準で見て、外の人が見ると素晴らしいのは富山なので、この価値が分かる欧米の観光客というか定住者を増やし、県内の人の意識を改革して、ここは実はすごいんだということを理解して、加賀藩の一部ではなくて富山県として独立したほうがいいと明治後に皆さんが気がついたように、もう一度、富山の明治維新を起こす必要があるんだと。

【高木委員】

- ・ 土肥さんがおっしゃった、今すぐに意識が変わらねばというのは本当にそう。僕の娘も今小1だが、週1でSDGsの授業がある。変わってきていると思う。
- ・ ただ、人の意識や価値観はそんな簡単に変わらない。さっき「おすそわけ」というキーワードを出したのは、すぐ変わるのは難しいから、富山の人全員がIT産業が分かるようになればとか、今の新しいメディアを使えるようになればとは言わない。ただ、そういう人たちに場を譲るとか機会を与える。先ほど藤野さんが隙間産業が大事だと言われたが、そういうことをやっていく。内川も、あの家を譲ってくれた人がいたから、今のようになったわけで、みんなが空き家をずっと抱え込んでいたらできなかった。そういう風に席を譲っていく。これは女性の話も一緒だと思っていて、権限とか権力を持っている男性が権限委譲するということが極めて大事で、それを「おすそわけ」というポジティブな価値観と捉えて、そうした人たちを褒めたたえる、称賛するという文化こそが大事。
- ・ 権限移譲でも、空き家でも、抱え込むんじゃなくて、どんどん使っていていいよ、若い人もチャレンジしていいよ、外の人もどんどん編集してくれと。そうした人をおすそわけアワードばりにどんどん褒めたたえていくことで変わっていく、新しい価値の人が勝手に編集していくという流れをつくれることができないかなと。
- ・ 中の人だとどうしても気づけない部分があるので、外の人が見て価値を分かっていく。

そういう人たちが一緒に協業していくことはすごく重要で、それこそが情報社会の在り方だと僕は思っているので今日のお話をさせていただいた。この場自体がそういう場になっていると思うし、そういうのをいかにつくっていくかという枠組みをつくるが、縦割りの中では難しいのであれば、今日お話ししたような新しい枠組み、会議体をつくることによって、ちゃんとそういう場をつくっていく。

- ・ 富山はすごくポテンシャルのある地域だと思うし、新しい観光立県や新しい幸せのモデルをつくっていける場所になると思っているので、新しいやり方とか構造改革自体を一緒につくっていけたらと、今日お話を聞いて改めて思った。

【新田知事】

- ・ 「ウェルビーイング」が、この成長戦略会議の中での大きなキーワードになってくるように思う。やはりこのウェルビーイング、今後、富山県の政策の一つのキーとして取り組んでいく。また、未来志向のウェルビーイングという言葉も出た。もちろん103万県民のウェルビーイングを高めていくことが大切だが、やはり政策として、1つは若い女性のウェルビーイングが優先順位が高いのかなと思う。
- ・ 来月も成長戦略会議を開催させていただき、中間取りまとめを行うこととなる。そのような形で今後進めていきたい。

○会議終了後に委員からいただいたご意見

【中尾座長】

- ・ 人口減少が続くなかで、人口の東京一極集中と地方分散が議論されて久しいが、我が国の持続可能性の観点から地方分散型が望ましい。
- ・ そのため雇用拡大と地域内エネルギー自給率を高めていく等の政策が必要である。
- ・ 地方の魅力、生活環境の向上を図る。
- ・ 産業連携、業際化、業際化による起業、起業化の支援
- ・ 農、漁、加工業、商の六次産業化により農業の企業化、農林の活性化を図る。
- ・ 実業的なユニークな専門教育機関を設け、学生の県外からの誘致、特に女性の富山への定着を図る。“女性活用、登用の富山”を目指して。
- ・ 医学、医療、薬の町 富山
- ・ 東京一極集中に対して、富山の地域際化を図る。環日本海地域の中核、北陸の中心、東海北陸の拠点地域として、観光、ビジネス、学術…の役割を果たしていく。産学官の一層の連携が重要。その組織を形成する。